

「学生教育ボランティア」活動報告会

「お兄さん先生」  
「お姉さん先生」

…小・中学校の中へ

「お兄さん先生」「お姉さん先生」と呼ぶのだそうだ。

ちょっとステキな愛称でしょう？ そう呼ばれてみたい、ような。

ネットワーク多摩がすすめている、「学生教育ボランティア」である。

多摩地区の公立小中学校で授業や学校行事のサポートをしたり、生徒たちと遊んだり。

中大生も年間100人ほどが参加している。

その目でみた学校の実情や、生徒たちの表情はどうなのだろう。

ボランティア体験者の「活動報告会」取材した。

学生記者 山崎綾香(法学部2年) 十竹下奈穂(経済学部2年) 十滝沢孝祐(総合政策学部3年)

4月12日。7104号教室には50

人弱の学生が集まった。授業開始日前日だったことを考えると、けっこう多いとみるか、少しマバラとみるか。

中央大学はじめ多摩地区の42大学、11自治体、企業など31機関で構成されている「社団法人 学術・文化・産業ネットワーク多摩」が実施する「学生教育ボランティア」は、今年で5年目。新年度の「お兄さん・お姉さん先生」募集を兼ねた「活動報告会」である。

昨年度の1年間、実際に教育の場で「先生」として活動した3人の学生が、興味深い現場体験を語った。

「さびし」生徒とどう接するか  
教職課程の判断材料に

「ボランティア活動を体験することで、2年次の履修の判断材料にしようと考えて始めました」

そう語る「お姉さん先生」は、森本まゆみさん(商・2)。彼女は入学後まもなく教職に興味を持ったが、1年次から教職課程を履修するかどうかは迷っていた。そんなとき、学生教育ボランティアの募集を知り、

応募したのだという。

福生市立第四小学校で1年生と5年生のクラスを担当し、主に授業内容についていくのが困難な生徒や障害を抱えた生徒の補助を行った。

小学生に好かれそうな優しいお姉さんといった印象。しかし、最初はなかなか生徒たちと打ち解けることができなかつたという。「先生に頼んで休み時間も生徒たちと過ごせるようにしてもらったんです。すると次第にみんな、関心を持ち始めてくれました。週1回の活動だったにもかかわらず、名前も覚えてくれて。とても楽しくなりました」

彼女がこの活動を通して実感したのは、コミュニケーションの大切さ。夫婦共働きなどの増加もあり、家での親子のコミュニケーションは大幅に少なくなっている。

「さびしさを感じている児童・生徒に、自分はどうのように接することができるのだろう、と自問しながら、こういう面で活動していけたらな、と考えるようになりました」と語る。「これから先も、小学生や中学生と触れ合える場があるときには、積



矢木澤智恵さん

DHDの子の世話役とい  
う貴重な体験をしたとい



長谷川義明さん

報告会に出席したのが始  
まりです」

これは長谷川義明さん  
(経・4)。女の子のフア  
ンが付きそうな、さわや  
かな「お兄さん先生」。

日野市立仲田小学校の  
小学3年生の教室で、A



森本まゆみさん

極的に参加していきたい  
と考えています」という  
言葉に意気込みが伝わっ  
てきた。

### 多動性児童の世話役 「ボクも構って」反乱

「これくらいの年齢  
になると、子どもと触  
れ合う機会もなかなか  
いないのですか。どう  
やったらそんな機会が作  
れるだろう、そう思った  
ときにちょうど学生課の  
前でこのボランティアの  
募集を目にしました。そ  
して僕も去年、この活動

う。ADHD……衝動的で落ち着き  
が無く、授業に集中できない「注意  
欠陥多動性障害」。その児童は、落  
ち着いてイスに座っていられず、廊  
下を走ってどこかへ行ってしまう  
り、時には学校外へも出て行くこと  
も。  
「その生徒をしつかり見ている必  
要、責任がありました。しかし同時  
に他の子にも勉強を教えなければな  
らない。1人の生徒ばかりについて  
いると、他の生徒も構ってもらえな  
い寂しさから、みんなどこかに行っ  
てしまうこともあって……大変でし  
た」  
子どもの心理も、それゆえ「先生」  
の苦勞もよく分かるエピソードだ。  
しかしそんな苦勞も、担任の先生  
と一緒に乗り越えた。  
「ふだん接することのできない小  
学生と一緒に遊んだり、話したり、  
給食を食べたり。子どもたちの面  
面をみるといよりも「触れ合う」こ  
とで、彼らがどういったことを考え  
ているかなどを、理解することがで  
きました。貴重な体験です」  
活動は週1回など空いている時間  
を利用してできるので、教職を履修

するにしても履修しないにしても、  
この活動から得られるものは多いで  
すよ、と付け加えた。  
愛着？ ふざけ？  
格下。先生への距離感  
最後に登場した「お姉さん先生」、  
八木澤智恵さん(総政・3)は見る  
からに明るい。がらりと雰囲気を変  
えて……。  
「私は将来サービス業に就きたい  
と思っていて、サービス提供につい  
て考えたかったです」  
教育に興味があるわけでも、とり  
たて子供が好きなのでもなかった  
らしい。  
多摩市立北豊ヶ丘小学校の1年生  
のクラスで、図工の制作の手伝いや  
音楽・算数の個人指導などを行った。  
その報告は、イキイキとしている。  
「純粹で、元気で、無邪気な子ど  
もたち。週3回の時間は、私にとつ  
て癒しの時でした。私なんかを「先  
生」って呼んでくれるのがとてもう  
れしくて」  
その半面で、「生徒は私を、本当  
の先生よりも格下だということをお

かっているんです。だからふざけて蹴ったりたたいたりしてくることも」

はじめはそれでも「かわいいな」と思っていた。しかし、本当にこれでもいいのだろうか。注意すべきか、でも注意して生徒との距離ができてしまったらどうしよう……。悩みや葛藤もあったという。

小学1年生は、なんでも吸収してしまう大事な時期だ。「その時期を一緒に過ごす責任を感じました」。高い意識を持って、言葉使い・服装・食事の作法などのお手本になれるよう努めたそうだ。

「ひとりの児童だけに付いていては全体が見えない」「生徒の人数と先生の割合も踏まえて、相手のニーズを考えて」という貴重な観察もある。経験が教えるのは、「広い視野を持つ必要性です」と話した。

「教育ボランティア」の人材は教職を目指す人ばかりではない。そんな「非教職」派を代表するように、八木澤さんは、

「たとえ教育に興味がなくても、この経験は自分を成長させてくれます」と、説得力あるメッセージで締

めくくった。

## ラクダの「コブ」の小中学校に 必要な「若さ力」

学校側の受け止め方はどうなのだろう。ネットワーク多摩とは独自に学生ボランティアの受け入れを行っている武蔵村山市立第二中学校の神成真一副校長が報告会に顔をみせ、興味深い学校事情を語った。

「学校はなぜ外部に人材を求めるようになったか」。その理由の1つに、生徒や児童の二極化、つまり「デキル」と「デキナイ」の差が挙げられる、と話す。

「1日の家庭学習の時間を調査してみると、『30分以下』の割合が全体の27・7%、『休日には何もしない』の割合が同じく36・2%という数字で表れました。土曜も休日になり授業時間が減ったのにもかかわらずこの状態では、基礎学力はつきません」

その結果、英語の定期考査などでも、顕著に学力の差が開いてしまうという。一昔前の得点分布図は真ん中を頂上にした山なりだったのが、今は各教科とも「ラクダのコブ」のよう

に山が2つになつてきているそうだ。必然的に、より低い得点の生徒たちの側に補助が必要になつてくる、と話す。

「そこで学生教育ボランティアが必要なのです。あなた方には教員には決して真似のできない強さがあるそれは、「若さ」です。若さを持つている学生さんたちは、どの教員よりも生徒と近いところにいることをわかつてほしい」

そして最後に、「学校では、勉強によつて満足感を得てほしいと考えられています。内容が分かるようになれば生徒は必ずついてくる。生徒の信頼を得ると、必ずやる気を見せてくれるようになります」と教育ボランティアへの参加を呼びかけた。

## 年間2―3000人参加

2000年12月。多摩都市モノレールの全通を記念して近隣の大学学長が一同に会して「大学サミット2000」が開催された。

「これだけ大学生がいる地域なのだから、学生の力を地域の子供たちのために活かせないかしら」

当時、東京都職員研修センター所長だった松尾澤幸恵さん（現・稲城市教育長）の発言である。

今年で5年目を迎える学生教育ボランティア制度は、そんなきかけから始まった。

多摩地域は日本一の大学密集地域であり、いわばアカデミーのシリコンバレーになれる可能性を秘めた地域だ。学生というリソースが、どう地域の教育ニーズに対して貢献できるか。大学による地域連携の先駆けとしてスタートした。近年では各地でこのような取り組みが進んでいるものの、広域圏で学生による教育ボランティア制度を実施しているのは多摩地域だけだという。

最新のデータによると、06年は中大・明星・帝京・実践女子大など多摩地域10大学から計235人の応募があった。参加人数は毎年200人―300人前後で推移しているという。受け入れ先は、多摩地域15市の161小学校と599の中学校。学校側の「求人」の多さ、切実さに比べて、まだまだ需給のバランスが成り立っていない。インターンシップ、

NPO活動、起業など興味の多様化を反映してか、いまひとつ応募者数が少ないのが悩みだという。

「学生に対してさらにPRしていく必要を感じています。1年生から参加できるのが、このプログラムの特徴でもあるので、新入生などにも積極的に活動して欲しいです」と、ネットワーク多摩で事業運営に携わる西村洋佑さんは力説した。

## そして、学生記者も

活動報告会を聞きながら、新2年の2人の記者（竹下&山崎）は、次第に心が動かされていた。打ち合わせたわけでもないのだが、ともに「ボランティアをやってみようかしら」と。山崎は、新年度から教職課程を履修している。

その場で申し込み用紙をもらい、後日正式応募。担当する小学校の面接を受け、5月末から別々の小学校の現場に赴くことになった。

学生記者の「お姉さん先生」体験ルポもお読みください。

## 体験ルポ 「お姉さん先生」奮闘中

# 笑顔と反応に励まされながら

学生記者 山崎綾香

子どもが大好き！ だから小学生と触れ合いたくて……。

私が「お姉さん先生」に志願した理由は、そんな単純なこと。いままで、大勢の小さい子と接する機会なんてなかった。だから直接関わること、小学生を知りたかった。私でも、彼らに何か教えてあげることができたらいいなあと、そんな期待も込めて。もちろん教職課程を履修しているせいもある。現場体験は大きいだろうと思ったのだ。

前日、急に不安が訪れた。相手は「現代」の小学生だ。想像とは違いかもしれない。なめられたら、反発されたらどうしよう……。

「子どもたちの中には複雑な問題を抱えている子もいますからね。学生さんも苦労しますよ」。面接のときの校長先生の一言が頭に浮かんで離れない。眠れなかった。3時間弱くらいしか。しかし緊張で一切眠気はないまま、いよいよ当日を迎えた。

## 小学校へ緊張の初登校

5月26日。初登校！初勤務！である。一緒に「お姉さん先生」になった記者の親友（古賀直子さん・法2）と、いつもならオヤスマタイムの朝の30分間の京王線も、「ど〜しよ〜」「こわいよ〜」のレンパツ！そして、最寄り駅から歩いて、日野市立

A小学校の校庭へと足を踏み入れた。8時15分。校庭にはもう児童がまわっている。バレーボール、おにごっこ、ドッジボール……無邪気に遊びまわる、私よりずっと小さな子たち。「懐かしい……」。少し緊張が和らいだ。下駄箱で靴を履き替え廊下へ行くと、小学生の匂いがした。お日様の匂いのような、甘ったるい優しい匂いだった。そこへ、一人の女の子。2年生くらいかな。「おはようございます」。声をかけてみた。「……おはようございます」。なんだかあったかい気持ちになった。

緊張がほぐれたのもつかの間、校長室へ行くと、ネームプレートと授

業表を渡される。私の受け持つクラスは2・3・5・6年生の算数のクラスの授業補助。「もうきょうからはお客さんじゃなく、先生ですからね」。校長先生のその言葉に、背筋がピンとなった。

### 照れてはいけないわ

1時間目、「5年×組」へ。先生に挨拶をしてから、教室の後ろに立つ。みんながチラチラ後ろを振り向く。が、ここで照れては「お姉さん先生」失格だわ。

「反応してくれるかな?」。胸のドキドキを抑えて、鉛筆が止まっている女の子に初めて声をかけた。「わかるかな?」。首を振る。わかりやすいように、ヒントを与えた。「こうしたらわかる?」。すると、彼女の鉛筆がスルスルと動き出した。そして「解けたあ!!」。満足げな笑顔をくれたのだ。その笑顔が本当にうれしくて、一緒になって「やった〜」と小声で叫んでいた。

小学5年生。人見知りの学年なの

だろうか、一見そつげなく見えてしまふけれど、こちらから声をかけるとうれしそうに反応してくれる。問題が解けると「そっかあ!」と。小さな呼応から生まれる快感——。必死に教えよう、できる限り多くの子に声をかけられるように。



中大生の「お姉さん先生」ふたり。古賀直子さんと山崎（右）

### 飛びついてくる2年生 落ち着いたフリ3年生

2時間目は「2年×組」。2年生の廊下へ行くと、「新しい先生だ〜」「アソボ!!」と、飛びついてくる子や大泣きしてる子、「見て見て」つ

て Denguri 返しをする子……。5年生とのあまりの違いに、思わず笑ってしまう。かわいい。「来て〜」と教室に引つ張り込まれて授業開始だ。

授業中もそれはもうにぎやかで、イスに座らせ、問題を解かせるのに一杯。教えようとする。「僕ねバスケ上手いんだよ」とか「この絵本一緒に読もうよお」とか。若い担任の先生の苦勞がしのばれる。ある落ち着かない男の子——1問かろうじて解けたときに、「わあすごい!!できるんだね〜」と声をかけると、スイッチオン! 必

あつという間に、チャイムが鳴る。小学校の「1時間」は45分! こんなに短かったつけ。慌てて次の教室へ急いだ。

死になって問題を解き始めたんですよ。エライね。ほめれば伸びる、きつと。しかしまだまだ甘えんぼさん。休みと一緒に遊んであげることができなくて、一人の女の子を泣かせてしまった。「遊んでよお……」とすすり泣きを始め、心がズキンと痛んだ。「時間がなくてごめんねえ」。手をつなぎながら教室まで見送った。彼女の表情が悲しげなままだったので、気がかりで仕方なかった。甘えつ子への対応、これからの課題だなあ。そんな気持ちを抱えながら、次の教室へ。

3時間目、「3年×組」。2年生からガラッと変わり、落ち着いてみえる。後ろにいた女の子は、「先生立ってるの大変でしょ、ここ座つていいよ」。席を作ってくれた。しつかりしてるなあ。しかし授業が始まる、「できたあ!! 見て〜」「青い色で丸付けて〜」「お前自分で解けるくせに先生呼ぶんじゃね〜よ」。とたんに「8才」が丸出しである。落ち着いたフリとお子ちゃんな

面をたつぷり見せてもらいへトヘト……チャイムに救われた、気分。「ふ〜」。休む暇はなく、4時間目、最後の教室が待っていた。

## 6年生は手ごわい？

「6年×組」「なめられるかな」ってじつはイチバン恐れていた学年である。実際はイチバン「気楽」な1時間だった。みんな真面目に授業に取り組み、疑問も自ら聞いてくれる。私はテストの丸付けを手伝ったのだが、みな真剣。威厳のある担任の先生の力だと思ふ。授業が終わると、先生は「ありがとう」と優しい言葉をかけてくださった。

この小学校、算数の時間は少人数制にするなど特に力を入れていて、6年生となると教えていても理解が早い。授業態度も「大人な」小6の子どもたち。しかし女の子たちは、どうやら勉強よりも興味のあるコトがあるようで……休み時間は質問責めにあつた。

「先生、独身ですか〜?」「デー

トってどこ行くの〜?」「どうやって彼氏作るんですか〜?」

そんなお年頃なネ。自分の小6を思い出して懐かしくなった。隣の席のナオキくん「片思い」、してたなあ。

そうして、4時間が終わった。

校長先生に「大変だったでしょう」と声をかけられ、「ハイ」。本音で答えてしまう。

小学校の実習4時間は午前中で終わり。でも、このあと大学の授業が待っている。元気は小学生に全部吸い取られたようで、「お姉さん先生」ふたりは会話もないまま駅へ向かった。一言で、「脱力」。

しかし、その日の大学での授業中に思った。みんな素直だったなあ、「先生」って呼んでくれてうれしかったなあ、笑顔をいっぱいくれたなあ、かわいかったわ……まだ疲れが残っているけれど、子どもたちのいいところばかり浮かんでくる。早くまた会いたい、そんな気持ちで

いっぱいになった。

今度はどうやって教えたらいいか、接したらいいか。そんなことを考えていたら、大学の「90分」はすぐに過ぎていた。

ひとつだけ、泣かせてしまった2年生の女の子のことが気がかり。帰りに「遊んであげられなくてごめんね」を言おうと思つたけど、彼女の甘えんぼが再発しないように、会わずに帰ってきた。来週、もう寄ってきてくれなかつたらどうしよう。

しかし、次の週。2年生の廊下に行くなり「先生だ〜!!」。彼女のほうから飛びついてきた。感激して、思わず私も抱きしめちゃった。

## 「天才少年Vs中大人」…?

次週2回目の「先生」は、初日もりも落ち着いて、余裕をもってできた(ような気がする)。やはり甘えんぼな子たちへの平等な対応は課題で、教え方なども、もっともっと知らなきゃいけないことはたくさんある。しかし、子どもたちの笑顔が、「頑

張ろう」と励ましてくれる。「お姉さん先生」も、これからこの「小学校」で再び勉強し、成長していきます。

親友との写真、少しは先生らしく見えますか? ほんとうは子どもたちと一緒に撮りたかったのだけれど、「個人情報保護法」施行後、児童の顔写真は校外の印刷物には載せてはいけならしい。「一人ひとり親の了解を得なければ」と聞いてあきらめた。

ところで校長先生にこんな相談をもちかけられた。

「4年生に高校生の数学を解きたいと言っている子もいるのよ。その子も指導してほしいんだけどどうかしら」

4年生といえは10歳、かな。

「10歳の天才少年Vs19歳の中大人、かあ」

見ものだね、みたいに周りにはやすけれど、どうしたらいいだろう。いや、講義と重なる時間的な問題で、けつして私、逃げてるわけではないんです。